

THE MOON ART CONTEST VOL.13

月のアート展

会期：2018年9月15日～10月8日

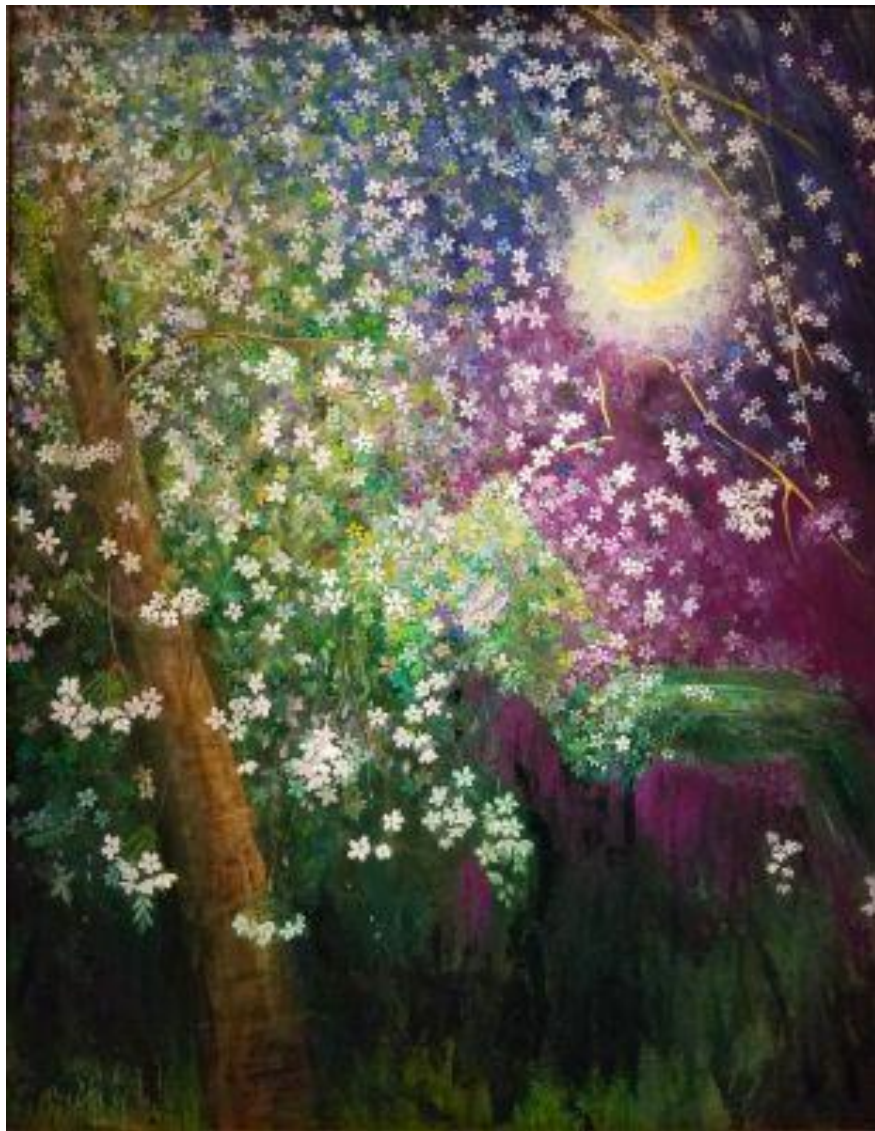
けいはんな記念公園 ギャラリー月の庭

審査員：京都造形大学 総合造形コース教授 柴田純生

京都造形大学 油画コース教授 奥田輝芳

【受賞作品】

審査員 最優秀賞



< 審査評 >

「とにかく沢山のさくらの花を描きたかった」との作者の言葉どおりに画面の大部分を桜の花びらで覆われています。綿密に描かれた花びらはいずれも正面を向き、作者の制作へのかたくなな主張として見る者を惹きつけます。さらに余計な要素を排除し、くどいほどに徹底した主題の展開を期待します。

審査員：柴田

『三春の滝桜 子孫樹』
野田 八重子



『不穏』
林 里美

< 審査評 >

不穏を表すのに決まったかたちはありません。あくまで概念としてあるのであって、その様相は自由です。そこに写実から抽象への糸口があります。雲をモチーフにしたであろう何度にも重ねられた紫色の面構成が独自の抽象的な視覚効果を生み出しています。画面サイズや月の大きさなど部分と全体の関係を意図することでさらなる広がりが生まれます。

審査員：柴田



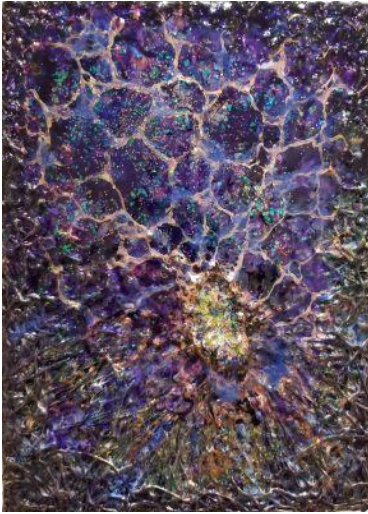
『またね』
やまきみなこ×ふくいまさお

< 審査評 >

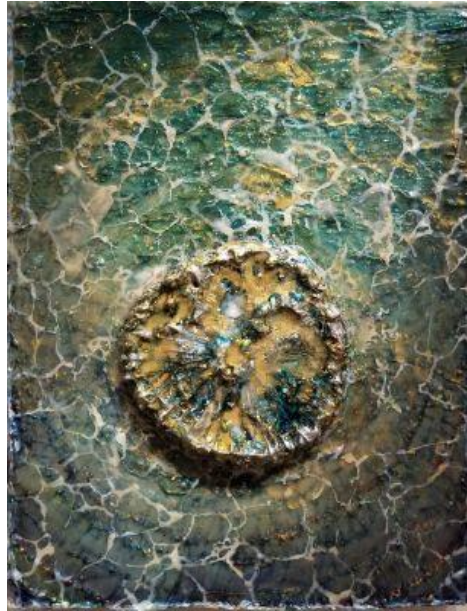
一つの作品を2人で仕上げることは、実際にはなかなか難しいことです。絵も書も本来は一人で作者が思うままに書いて（描いて）仕上げる方がずっと楽です。わざわざそれを2人で仕上げるには相当の信頼関係がないとできません。さらっと作品を見せていますが、この一点ができるまでにどれほど反故になったものがあるのか気になります。これからももっともっと挑戦してほしい、可能性を感じる作品です。

審査員：奥田

審査員 特別賞



『人魚の心臓』



『癒を求めて漂う月』
垂見百之助



『ふかふか
お月様の着水』

< 審査評 >

透明樹脂や様々な素材のキラキラとした物質感が素敵な作品です。作者の名前からどんなお爺さんかと思っていました。この作品は、見るからに手法が若いのです。発想や冒険することに躊躇がありません。自分の欲しいものをぐっと手繰り寄せる若さを感じます。作品が小ぶりで手が混みすぎているのですが、もう少し中にあるモチーフと色彩を整理するともっと強い作品になります。これからは楽しみですね。

審査員：奥田